慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	プラトン「メノン」研究
Sub Title	
Author	星野, 重顯
Publisher	三田哲學會
Publication year	1937
Jtitle	哲學 No.17 (1937. 3) ,p.29- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000017-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

プラトン「メノン」研究

星野重顯

目次

一、徳の本質(70A—79E)
二、學一般の可能性、想起說(80A—86C)
三、徳の可教性(86C—89B)
四、徳の不可教性、アニトスとの會話(89E—94E)
五、智識と正しき考へとの研究、神賦(95A—100C)
六、結論
七、諸學者のメノン篇觀
(ルトスワスキー、ウイラモーウッツ、ナトルプ)
八、ἀρετή の語義

一　徳の本質(70A—79E)

徳は(一)一體教へられ得るものか、或はそうではなく修養して獲られるものか、或は又修養にもよらず生れつきか何かで人間にもともと具つてゐるものかどうか、とメノン(二)は此の篇で何等の前書なしにソクラテスに尋ねてゐる。(三) テッサリヤで賢明と學識とをもつて自惚れてゐるソヒスト、ゴルギヤスの學説をきゝ、此の如く良く整頓され、既に完全に排列された質問をしたメノンの大自惚に全く驚いて、上手なソクラテス一流のアイロニーでもつて、テッサリヤで保たれてゐる全盛の賢明を、アテンでの枯燥に對立させて、アテンの土地に一般に擴つてゐる智識のかの枯燥を私自身も又負されてゐるわけだと先づソクラテスは皮肉つてゐる。そして此の皮肉から自然にソクラテスは徳の本質を未だかつて知らぬから、從而又徳の或る特質も、或は徳の教へ得べきものか否かも説く事が出來ない(四)と結果して來た。彼の言葉の力の及ぶ限りに、説明せんとする凡てのものについて正しき概念を得んとし、又説かんとするのをソクラテスは常としてゐた。故に此の賢明な思索家ソクラテスは此の自分の職分としてゐる概念の獲得、本質の説明を滿足させんが爲に自分の友人にも、反對する人にも、弟子にも、敵人にも、否何等關係のない人にも、

公然と自分の思想を傳へる、それは己の見出せる智識を提供せんとする人としてではなく、どうして、又どこで智識を求むべきかを示さんとする人として、又既に知つてゐる人としてではなく、他人に又他人から學ばんとする人としてである。彼は己の知つてゐるものを自からに引き出して、之を否定し、むしろそれを眞に知ることなしに、ホンの少ししか知つてゐないと稱して他人と共に初めから學ばんことを願ふのを習ひとしてゐた。かくて此の習慣に從つてソクラテスはメノン篇に於てメノンと對立して話を進めて、德の成立の仕方、特に德の敎へ得べきや否や、それの根底となる德の本質、德の概念について、最初に掲げた質問を檢討して、德の Wie? (ὁποῖόν τι;) から Was? (τί ἐστιν; 71B) に導いて行つた。(註) メノンはソヒスト的知識の寶庫から取り入れた、缺點だらけの非哲學的な種々の說明をしなければならなかつたが、ソクラテスの導きに從つて層一層德の概念に近附いて行つてゐる、然し此の概念を充分な仕方で創り出す事は出來なかつた。メノンは德の種々な型、變化し易き、直に混亂する德の諸現象をソクラテスが探求し知らんとする樣な一般概念に高め得なかつた。最初にメノンは主觀的性質に拘束され、性、種、年齡、身分、

その他主觀の他のものへの關係に成立する德の種々の姿を擧げることによつて平易に德の本質を規定し得ると考へた。それ故に彼は男子の德―それは國家の務を司り、此の國務管理に際して味方には公安を、敵には害惡を呈へる能力である―を語り、婦人の德―それは世帶を良くし、男子には常に貞淑であり得ることである―を語り、そして又彼は子供の德、女兒の德、老人の德、自由民の德、奴隷の德を區別してゐる。かゝる說明は德そのものゝ說明には充分ならざる事は明かである。(六)然しよしメノンは此の區別からして唯一の概念にあてはまる德を明るみに出し得ず、一般を特殊から分離し得ず、外的現象から內的本質に高め得なかつたとしても、此の概念規定の最初の試み中に一般的な概念、德の本質的特質―卽ち彼の活動範圍內でより高き攝理によつて己の職分や立場に命ぜられた本務を忠實に思慮深く、賢明に實現する事―此の考へをプラトンはカルメニデス篇中に表現してゐる―が含まれてゐる事を拒むわけには行かぬ。(七)ソクラテスは詳細に說明して彼の說明の論理的缺陷を明にしてゐる、卽ち德を定義するに當つて數多き德や、それの種々相を揭げることは效なきことであると、そしてうまく選んだ例 (ἰσχύειν, μάγε-

θος, ἰσχυς) で凡ての德に共通なもののみが德の概念を創り、かくてあらゆる性、あらゆる年齢、あらゆる職業、あらゆる關係にある德を包括してゐる、統一された共通な德の概念 μία ἀρετή があり得ると敎へてゐる。かくてメノンは德の定義に向つて第二の精進をしてゐる、而して德の本質を、人々を支配する能力であるとしてゐる。ἀρχειν οἷόν εἶναι τῶν ἀνθρώπων. 73 C. 此の定義は明かにソヒスト的知識から引き出されてゐる。ソヒストは國家事務の支配、管理の才能を自分の學徒に敎へ込む責任を負ひそしてかゝる才能にソヒストは最高の幸福を認めなければならぬと考へてゐた。プラトンがソヒストの若者メノンに言はしめた第二の德の定義にはけれども眞理の核心が潛在的に存在してゐる、と言ふのは管理、支配の能力はた易く德の概念に加はるから。眞の德、人間生活のあらゆる關係を統御するとか、又德の地盤根底の上にのみ理想國家が建設され、成就され、維持され得るとのかのプラトンの言葉中には暗々裡に美しき眞理が埋れてゐる。然るにメノンの呈示した德の概念の第二の說明は人間の全體にあてはまらぬ。その一部のものはかゝる德を所有し得ないから、それ等のものには妥當しない。例へば普通支配の能力もなく

又司配することの出來ぬ子供や奴隷には此の能力は閉め出されてゐるし、又此の定義自身はソクラテスによつてつけ加へられ、メノンによつても承認された樣に「正」を伴つた司配のみが德に屬し得るとの制限が添加され、(八)正は然し多くの德の一であり、德の概念とならぬ限りに於てはまだ〳〵完全なものとは言へない。(九)こゝでソクラテスは自分の話相手メノンを今問題にしてゐる德の概念の新しい一般本質規定に導くことの困難なるを早くも認めて、一般と特殊、多樣と統一、高次と低次の概念間の差異を再度說明する樣に强いられてゐる。かくてソクラテスは例證に再び賴りて、最初に、德の概念規定の練習(μελέτη 75 A.)として、圖形の正しき定義と誤れる定義とによつて特殊なものから一般的なものゝ概念を創る課題をメノンに知らしめんとして、正しき定義は定義せんとする概念の限界を決して踏み越へてはならぬし、又その際に外的な非本質的な、偶然的な特徵を少しでも顧慮してはならぬことを說明してゐる。かくてプラトンは數學的圖形とは何か、τί ἐστι σχῆμα; との質問を發して、メノンのためにその解答を自分が引きとつて圓は圖形であるが然し圓以外に尙多くの圖形があるんだから直ちに圖形そのものではない

と説明し、そして彼は同様に圓は直線や、人が圖形と呼び慣してゐるその他のものと同様に、それが概念「圖形」の範圍内にあるためには凡ての圖形に共通なるもの τοῦτο ἐπὶ πᾶσιν をもつてゐなければならぬとの確信をメノンに漸次起さしめた。然しメノンは今得た知識にも拘らず、かの共通なものを自から探求すべきソクラテスの勸告に從ふことが出來ず、この問題をソクラテス自身が解決する樣に—後では自分が凡ての德に共通であるものは何かとの問題は片附るからとの條件の下で—賴んでゐる。そこでソクラテスは此のソヒスト學徒に新しい罠をかけて、皮肉たつぷりに圖形の概念を次の樣に定義した。「凡てのものゝ内で恒に色をともなひ、色と共にある所のものだけが圖形である」(一〇〇)と。此の定義の缺點あること、排斥すべきものなることをメノンは色の本質が未だ定まらず、知られてゐない事情から正しく認めた。此の皮肉な定義をプラトンはソクラテスにどう云ふ風に人は定義してはならぬかを示さすために、又人が定義中にそれ自からが未だ充分に知られてゐず、それ故にそれ自身も未だ充分研究しなければならぬ樣な概念を採用する過をさせぬ樣前以て警告さすために言はしめてゐる、と言ふのはいづれの

定義でも定義中に呈へられた特徴について明晰な確定的な表象を得て初めて概念の本質中に完全な知識を獲ることが出來るからである。而して疑もなく此の定義をもつてしてはソヒストからでも―その弟子たることをメノンは誇つてゐるが―一本つき込まれねばならない、と言ふのは此の定義は或るものゝ本質とか概念の問題に關しては何等よりよき事を成し就げてゐないから。そこでソクラテスは此の間違つた定義になされる反駁を顧慮して種々の質問をしながら、メノンに答へさせることによつて確信を獲た、卽ちソクラテスが概念圖形の自分の定義に着物を着飾らして言ひ表したその意義をメノンは悟つたのである。かくて説明せんとする概念は嚴密に數學的領域内にあり、單に數學的根本概念に基くものなることを知るに至つた。そして圖形は「立體を得る所のもの、立體の限界である」。(一一)此の定義はソクラテスがなしたのであるが然しメノンは彼の目前にもち出された見本によつて自分が今度は德の定義をしなければならなかつた。然るにメノンは再度、尙又色の定義をソクラテスに求めてゐる。ソクラテスは皮肉に色とは「視覺にかなひ、且つ知覺せられ得る圖形からの放出物である」と定義した。(一二)此

の定義はソクラテスの言へるが如く悲劇的である、と言ふのは先にソクラテスが圖形の第一定義(悪例)に於てメノンに注意した制限を無視して定義中に定義されてゐない視覺とか放出物だとかの概念を含んでゐるから。此の定義をソクラテスはエンペドクレスーソヒスト中の一學派の重鎮でゴルギアスは此の派に屬する—の言葉をとつて美麗至極に定義したのである。然し此の間違つた定義はゴルギアスの徒としてのメノンには、此の様な仰山な、哲學的術語で包まれ、そしてそれ故に局外者には理解し難い説明の故に、爭ふべくもなく大なる魅力を持つたにちがいがない。かくてソクラテスは數學の圖形の正しき定義と、誤つた定義と又ソヒストの嗜好にかなつた間違つた色の定義とによつてメノンにどの様な積極的性質や特徴が概念規定にとつては呈へられなければならぬかを示した。そこでメノンは德の第三の定義をしてゐる。此の第三の德の定義はソクラテスの要求する所のものに稍〻近づいて來てゐる様に見える、卽ちそれはメノンが自力でなしたものではなく、或る詩人が言つた所のものを自分の目的に役立てゝ德とは「吾々が美しきものを望んでそれを獲る所の能力である」。としてゐる。(二三) プラトン

が此の定義によつて再びソヒスト學徒なるメノンに空虛な術をたゝへしめソヒストの街へる見榮を見せびらかさしめて、詩人の語を利用せしめてゐる此の所は心なく見逃してはならぬ。プラトンは明かに此の詩人は知識の根底に立つてゐるのでなく、動搖してゐるドクサの立場に立つてゐる事を示さうと志してゐるのを吾々は觀取し得る。此の定義はメノンは德の獲得を高價な物財の獲得と同樣に全く外面的に考へた。從つて第三の此の定義はメノンが期待した樣な稱讚をソクラテスから得る事が出來なかつたのは至極尤もである。此の定義はプラトンが學問の研究上、誤つた研究方法とデアレクティークの正しき方法とを對照せんとするプラトン學徒への一指示である。それ故にプラトンは此の定義を個々の點にわたつて批判してゐる、卽ち美或はプラトンの用語によればそれと本質的に同一である善を得んとの慾求は凡ての人にとつて明かに同一である、何んとなれば知や意志をもつてゐる人は誰も惡、此れから結果して來る不幸、悲慘の狀態を積極的には望みはせぬ、從つて美、善を慾求する點では何人も他の人より劣つてゐるものでない、反つて善を獲得する能力に異りがある。かくてメノンの打建てた

定義は次の様に修正される、即ち美や善を作り出す能力は實に德に隷屬するのであつて美や善を求むる努力は此の定義からしては自明なものとして、從つて或る餘計なものとして引き離すべきである。かくてメノンも承知の上で第三定義は變化されて、よりよき形で「德とは善なるものを作る能力である。」[一五]とされた。次に τὰ ἀγαθά なる言葉が批判されてゐる。第三定義では τὰ καλά なる言葉が用ひられてゐたが此の兩者は同意義のものであるとメノンによつて承認されてゐる。所がメノンは τὰ ἀγαθά の下にソクラテスの期待してゐた様な道德的善を理解せずして全くソヒスト的に感覺的財寶(健康、富、金銀、名譽、權勢)を考へてゐた。又彼は人間の性質の魂的な、神的な本質、從つて人間の神的性質に深く根ざしてゐるより高き德を認めなかつた。そこで自分の話相手に此の定義に於ける τὰ ἀγαθά の概念の理解がまだまだメノンの考へとは遠くかけ離れてゐるのを知らしめんとしてソクラテスは此の概念の下に名譽や權勢や金銀の獲得を理解すべきや否やを尋ねてゐる。メノンは此れを肯定して德の概念を例證的に金銀を獲得する力であるとしてゐる。[一六] 金銀を獲得せんがためにソヒスト達は實に青年教育に努力して

ある。所がソクラテスとメノンとの意見が一致した所によるとかゝるものゝ獲得、所有に正義を附加してかゝらねばならぬ。かの能力の場合でも德の概念の問題に關しては「正」の性質を決定することが重要事である。何んとなれば善と考へられるものを「正」なしに得る能力は罪惡と言はれるから。此の說明によつて此の二人の對話者は非常に接近したと言ふわけには行かない、何んとなればメノンはソクラテスによつてなされた捕捉を甲斐々々しく採用はしてゐるがソクラテスによつて圖形と色とのあの助船としてなされた定義の見本を無視して再度同じ程度に低次の制限された概念「正」をより高次の總括的な概念、全體概念「德」から區別し、一般に嚴密な論理的法則に從つて考へることの彼に不可能なることを示してゐるから。(一七) かくてメノンは困却し、狼狽し、狐疑し、不確かな考へを起した。一概念を說明するに當つて自分の話相手を明からさまにアポロス(道なき所)にもつて行くのはソクラテスの常とする所である。かくて此篇でも此の結果彼等が取扱つてゐた以前の本來の對象—德の本質、概念、或は德の敎へられるか否かの問題—を離れてメノンの此の困却、狼狽は知識の缺けてゐる悲しき結果であるとソクラテ

スは指摘した。此の表示によつてメノン篇に於ては同時に誤り、或はアポリヤ(アポロス)によつてのみ眞理への道が生じて來ると言ふ嬉しき斷定がなされ、そして眞なる知識を勇敢に求め、似而非や知識を正直に放棄する樣にとの好意あるソクラテスの勸告をもつて知識一般の概念說明に移つて行つてゐる。

(一) ἀρετή には種々の意味が含まれてゐる。一般に excellence (of any kind) の意味に使用されてゐた。ソクラテスに至つて goodness の道德的意味をもつに至つた。(Liddell and Scott: Greek-English Lexicon. Ast: Lexicon Platonicum.) (石原、プラトンの對話篇「メノン」に就て。哲學雜誌四五八號) 尙八を見よ。

(二) メノンはテッサリヤのラリッサ(?)の人でゴルギヤスの弟子。キロスが兄アルタクセルクセスに敵對した時にキロス方の傭將校として出てゐる(B. C. 401)キロスの死後テッサフェレネスに捕へられ長い間の拷問で死刑にされてゐる。(Xenoph. Anab. II. 6, 21 ff) 此の篇はメノンがアテンを訪問してアニトスの家に客となつてゐた時にソクラテスと路傍で會つての會話である。クセノホンによればメノンは性格はあまりに良い人ではなかつた。

(三) "Ἔχεις μοι εἰπεῖν ὦ Σώκρατες, ἆρα διδακτὸν ἡ ἀρετή; ἢ οὐ διδακτόν, ἀλλ' ἀσκητόν; ἢ οὔτε ἀσκητὸν οὔτε μαθητόν, ἀλλὰ φύσει παραγίγνεται τοῖς ἀνθρώποις ἢ ἄλλῳ τινὶ τρόπῳ; 70 A. (διδακτὸν oder ἀσκητὸν は此篇では後には區別されてゐない)。

(四) ὃ μὴ οἶδα, τί ἐστι, πῶς ἂν δποῖόν γέ τι εἰδείην; 71 B.

(四)　Prota. 319 A. 360 E. にては τί ποτ ἐστὶν αὐτὸ ἡ ἀρετή が明かになれば德の可教性は明かになると言つてゐる。Laches も同樣に此の問題を ὅ τι ποτὲ τυγχάνει ὄν. 190 B に求めてゐる。

(六)　拙稿　プラトンの對話篇「プロタゴラス」哲學十一卷。

プロタゴラスが智慧を定義するに當つて同じ樣な方法を用ひてゐる。

(七)　Susemihl: Die genetische Entwickelung der platonischen Philosophie. Leipzig 1855. Bd. I. S. 66. Wenn zunächst Menon statt des einen Begriffes einen Schwarm von Tugenden einführt, die sich nach ihren Besitzern und deren Lebensstellung unterscheiden sollen. p 71 E. f., so liegt darin wenigstens die Wahrheit, dass treue und einsichtige Erfüllung seines Berufes, das τὰ ἑαυτοῦ πράττειν des Charmides, ein wesentliches Moment der Tugend ist.

(八)　οὐ προσθήσομεν αὐτόδε τὸ δικαίως, ἀδίκως δεμή; 73 D.

(九)　(ἡ δικαιοσύνη) πότερον ἀρετὴ, ἢ ἀρετή τις; 73 E.

(一〇)　ὃ μόνον τῶν ὄντων τυγχάνει χρώμαπ ἀεὶ ἐπόμενον. 75 B.

(一一)　εἰς ὃ τὸ στερεὸν περαίνει. στερεοῦ πέρας 76 A.

(一二)　ἔστιν γὰρ χρόα λπορροὴ σχημάτων ὄψει συμμετρος καὶ αἰσθητός. 76 D.

(一三)　ἐγὼ τοῦτο λέγω ἀρετήν, ἐπιθυμοῦντα τῶν καλῶν δυνατον εἶναι πορίζεσθαι. 77 B.

(一四)　Wilamowitz: Platon 1919. I. 272 ff.

(一五)　τοῦτ' ἔστιν ἄρα ἀρετὴ, δύναμις τοῦ πορίζεσθαι τἀγαθά. 78 B.

(一六)　註(2)メノンは可成名譽慾物慾に富んでゐた事は彼の行動にもクセノポンの著作にも見え

る。

(一七) λέγεις δέ μοι ὅτι ἀρετή, ἔστιν οἷόν τ' εἶναι πράγματα πορίζεσθαι μετὰ δικαιοσύνης. τοῦτο δὲ φῂς μέρος ἀρετῆς εἶναι; "Ἔγωγε. Οὐκοῦν συμβαινέτ ἐξ ὧν σὺ ὁμολογεῖς, τὸ μετὰ μέρους ἀρετῆς πράττειν ὅτι ἂν πράττῃ, τοῦτο ἀρετὴν εἶναι. 79 AB. 即ち ἀρετή= τὸ μετὰ μέρους ἀρετῆ πράττειν.....となり ἀρετη が兩邊に表れて來る。

二　學一般の可能性、想起說 (80 A—86 C)

困却と狼狽にあるメノンはソクラテスにどんな方法で吾々二人共に知つてゐないかの概念に達すべきかを尋ねてゐる。と言ふのは—ソヒストのよく使ふ手であるが—人は自分の知つてゐないものを探求し得ない、何を探求すべきかを知らぬから、よし此の探求、研究が可能であるとしても、自分の探求し得たものが、先に探求し研究せんとした當のものであるかどうかを確定し得ないから。此のあらゆる學問、研究を放棄したメノンの主張—此の主張にソクラテスは華美なソヒスト的狡猾さを認めてゐる—は魂の先在してゐた事に論及することによつて否定されてゐる。(一) 此の魂の先在說はプラトンが魂の不滅を證明せんとする多くの證

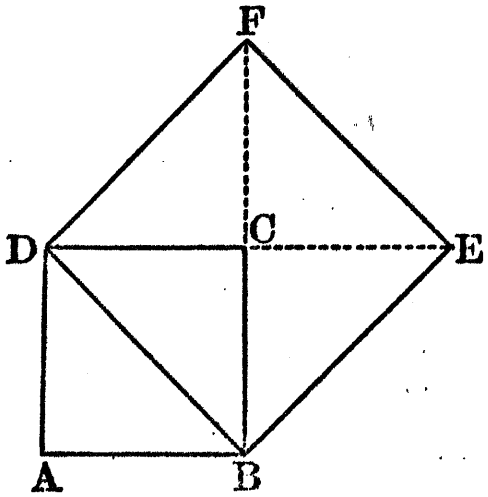
明中の一である。(二) 魂が今ある以前に見たもの、知つたものを想ひ起すことについては魂が肉體と分離した後にも尙存續すると同樣にプラトンは堅く此を信じてゐた。眞なるもの、美なるものを把握することはプラトンの考へによれば此の世界では困難である、と言ふのは此の世界での魂はその出生の時に此等のものをもはや自分の印象に遺してゐないから。かくてプラトンは此處で自分の見解を言ひ表して次の如く結論した。卽ち人間の魂は不死で、永久なもので、度々此の世界にも出て來る、そして凡ての魂は肉體と結合されてゐる間に無常なものを、又肉體と分離してゐる時には常住なものを見、又經驗して來た、かくてかの研究、學問、知識は魂が既に前生に於てかつて見、又知つたものを想ひ起すこと、卽ち魂に既に潛在してゐる魂の度々の遍歷に集められた見聞、經驗を目醒し發展さすことになり立つ。プラトンは此の神話的、神祕的な考へをパイドン、パイドロスに於ても物語つてゐる。その意味は現代的な言葉をもつて說明すれば—後に一層明かにされるであらうが—讀書或は聽講と言つた樣な一切の外的源泉によつては知識は生ずるものでなく、只自分自身が考へ出す事によつてのみ眞の知識が獲られるとなし

てゐる。そしてそれは理性の活動、熟慮、原因の推理等によつて概念、イデアを把握することである。徳に關しても完く同樣であつて、魂は自分が以前に既に知つてゐた概念「徳」を記憶の内に呼び起し得る筈である。此の長々しい魂の先在の説明、想起の説明によつてソクラテスはメノンに次の事を意識させて、研究の可能を敎へてゐる。即ち吾々が研究の緒口として只一つの事柄を想ひ起した場合に、疲まず研究すれば自分のAktuellに知つてゐない凡てのものを自からに見出し、知ることが出來る(三)—何んとなれば人はそれを以前に一度知つてゐるのであるから—又その緒口となる一事を發展し得る樣に指示的な質問をすれば知識は自からの内から—敎へられることなしに—湧き出ずる。此の緒口、出發點として役立つもの μόνον ἀναμνησθέντα (81 D) は計畫的な質問により同姿の思想を各人の内に呼び起す、と言ふのはソクラテスの説によれば凡てのものの本性は同族であり(四)、魂は凡てを學び知りつくしてゐるから(五)。即ち以前のものに似た或る同じ關係に於て見、或は考へたものを想ひ起し、そしてそれ故學ぶと言ふことは順序正しく發展させて、それを同姿の概念や、考へに結合することである(六)。メノンは學ぶ事、認識は想ひ起し、

即ち既に吾々の内にあるものを發展させて吾々の内で完成さす事であるとのソクラテスの考へを理解し難く考へてソクラテスにその説の演示を求めた。かくてソクラテスは次にメノンの侍童(パイス)を試驗臺として、學は想起であるとの演示をしてゐる。(七) ソクラテスは數學が概念的思惟への理解を練習するに最も良いものと考へて、一邊二呎の正方形を地上に描き簡單に一邊二呎の正方形以外にも數多の正方形がある事を説明して、侍童の内にある數學的知識を呼び起さんとして種々質問してゐる。かくて侍童を相手とした長々しい問答の末に彼の主人メノンが前に困却、狼狽に陷つたと同樣に此の侍童もソクラテスに自分は此の數學的質問には困却すると告白せしめる迄ソクラテスは侍童に尋ねてゐる。(八) 此の侍童の知らぬと言つた此の困却、狼狽は、例によつて、ソクラテスの學的認識にとつては貴重なものである。彼は知つてゐると思つてゐたものをその實知つてゐなかつたと言ふ事を知り、かくて己の知らぬことを全く眞面目に求めんとする意志を抱かしめる。ソクラテスはメノンを侍童の例でメノン自身も又自分の無知なる事の自覺が眞の知識の第一階段であることを知り、又人が知らぬ事を熱心に探求するこ

とによつてのみ人間の魂は怠惰と無力とを防ぎ、只これによつて向上せしめられ、力附けられることを知る樣にメノンに希望してゐる。ソクラテスが好んで自分の話相手に起させるあの困却、狼狽は或る程度に人に知識慾を起させる知識の泉であるとソクラテスは說明してゐる。かくてメノンは知識を信じるに至り、根氣よき秩序ある質問によつて不確かな考へとか、單なる憶測とかは確實な知識や純粹な眞理に發展し得るものなることを知つた。此の嬉しきメノンの新しき確信にソクラテスはメノンに此れから自分が侍童に試みる、自分の知つてゐないものを他人から敎へられる事なしに如何にして侍童が自分自からの內から自分自からに發見するかを注意深く觀察せんことを結びつけてゐる。しかしてソクラテスによつてメノンの侍童に新しい試みがなされた、卽ち侍童は自分に向けられた質問—それは再び正方形の圖形であつたが—に正しい答へをしてゐる。そして自からに順次、ソクラテスの望んでゐた結論に到達した。卽ちA正方形の對角線上のB正方形はA正方形の二倍の面積をもつ。或は又有名なピタゴラスの言つた所であるが、此の場合、二等邊直角三角形の斜邊上の正方形の面積は二底邊上の

正方形の和に等しい。



1) 2ABCD＝BDFE

2) $\overline{AB}^2+\overline{AD}^2=\overline{DB}^2$

實にソクラテスの質問は答へが正しくなされる樣に決定的に又明瞭になされてゐる事は承認しなければならぬし、又かゝる結果に導かんとする事象をちやんと、ソクラテスは自分の頭の中に構成してかゝつてゐたとは言へ、しかも教養の完くない侍童の頭惱で此の幾何學に例を引いた難解な教育を享受し得た(九)ことは、よしその知識は不完全なものであり、潛在的のものであるとしても或る一般概念を侍童が既にもつてゐて、今ある以前に知識を得てゐたと云ふ事を承認することによつてのみ説明し得られるものである。(一〇) そして計畫的な方法でかの一般的な考

へや、又それ故に各人の知識を意識に呼びもどすこと、實に各人が自から言はゞとり出す事は想ひ起し以外の何ものでもない。(二二) プラトンは此の暗示的な計畫的な彼の師の學問方法を篤信して、此れを尙發展させて此の方法をデアレクティークと呼んで、此の方法によつて自分の弟子達に自分自からに思惟し、自からそれの發展を言はゞ自分の內から要求せしめた。(二三) そして侍童との此の興味ある話によつてソクラテスに特殊な批判、稱讚、尊敬を加へんと欲したことは今更言ふ迄もない。(二四) ソクラテスの所謂知識の產婆術の見本としての此の侍童との會話は高く評價されて良い。此處では良く、正しく、明かに、生き生きと概念の發展がソクラテスの秀れたる腕の下で進められてゐる。又實際に侍童との間になした此の實驗によつてソクラテスはメノンに敎へることによつてではなく、反つて指示的な質問によつて或るものから知識をとり出すこと、卽ち學問と想起とは同じものであるとの確信を得せしめてゐる。かくてソクラテスとメノンとは自分等二人とも知つてゐないものを研究しなければならぬと結論し、一端中止してゐた德についての研究を續け德の概念を知らんと努力し、メノンは旣に德の本質の問題の開明に助力

することを契ひ、先づ對話の初に置いた德は敎へられ得るか又は自然にそなはつてゐるものかどうかの問題に解答せんことをソクラテスに願つてゐる。吾々は此處でソクラテス―プラトンが侍童との對話によつて學問、研究に際して次の三階段を經て初めて所期の結果に達するものなることを吾々に敎へてゐる事を銘記すべきである。即ち(一)吾々が知つてゐると思つてゐる事は實は本當に知つてゐない82E.(二)そして知つてゐなかつた事が判明してはたと當惑するが、此のアポリヤは必ず通らねばならぬ通過點である 84A―C (三)此の通過點を通過してこそ初めて問題を解決し得る、神話的に言へば想起し得るわけである。(一四) 86C.

(一) 拙稿　プラトンに於ける魂の不滅　哲學第十五輯

(二) パイドンに於ては魂の不滅を證明せんとしてなされてゐるが此の篇では智識の可能を證明せんとして魂の不滅の證明がなされてゐる。

(三) 人間の魂は凡てのものをPotentiellに而して神の魂はそれをaktuellに知つてゐるのである。此處で知つてゐない、知ることが出來ると言ふのはaktuellの立場で言つてゐる。 Soph. 228 C.

(四) ἐὰν γὰρ τῆς φύσεως ἀνάγκης ἀναγκασθῇς ἀφῇς. 81 C. プラトンは尙ソクラテス以前の神話的合理主義的自然哲學に影響されてゐる。

(五) 81 C. 而して喚び起す方法がdialektische Methodeである。

(六) 何等感覺的性質のないイデア (μία ἀρετὴ σμικρόν τι ἀρτῶν—οὐσία 72 A) はそれに似たる感覺的物を見た時に思ひ起されるのであつて、思ひ起されたイデアは決して物ではない。それは物の科學的に考へられた point of View である。(Stewart, Platons doctrine of Ideas. Oxford. 1909 p. 26) パナトルプの所說參照。

(七) τὸ μανθάνειν ἀνάμνησις ὅλον ἐστίν. 81 D. 82 B.

(八) Ἀλλὰ μὰ τὸν Δία, ὦ Σκάρατες, ἔγωγε οὐκ οἶδα. 84 A.

(九) 拙稿註 (1)

(一〇) Εἰ δὲ μὴ ἐν τῷ νῦν βίῳ λαβόν, οὐκ ἤδη τοῦτο δῆλον, ὅτι ἐν ἄλλῳ τινὶ χρόνῳ εἶχε καὶ ἐμεμαθήκει; οὐκοῦν οὗτός γέ ἐστιν ὁ χρόνος ὅτ' οὐκ ἦν ἄνθρωπος; 86 A.

(一一) τὸ δὲ ἀναμαμβάνειν αὐτὸν ἐν αὑτῷ ἐπιστήμην οὐκ ἀναμιμνήσκεσθαί ἐστιν;

(一二) 然し 86 B に於てプラトンは想起說を無理矢理に固守するものではないが、只知らぬことを知らず (80 E) として全く探求せぬよりはましだと語つてゐる。

(一三) dialektische Methode の好見本である。ナトルプによれば此のデアレクティークによつてイデアの觀念が生ずるとしてゐる。(37) 而してアレチーが外部から得た所謂智識なる時にはそれは敎へられぬが、內部から想起された智識なれば敎へられ得る。そして此の敎育方法はソヒストの rhetorische なるに反して dialektische なものである。

(一四) Fliedländer: Platon. Bd. I. S. 286

三　德の可教性（86 C—89 B）

Wenn Tugend Wissen ist, ist sie lehrbar

Tugend ist Wissen.

∴ Tugend ist lehrbar.

ソクラテスの考へでは一體德の本質を極めずしては德の教へられるか否かの問題は解決出來ない。然るにメノンは先づ德の教へられるものかどうかの點を説明して呉れる樣に願つてゐる。ソクラテスはかゝる概念を知る以前にその性質、特徵を知らんとする哲學的手續に不贊成を物語つてゐるが、此處ではメノンに一歩をゆづつて一つの假設—數學に於ける間接證明のそれの樣に—から ἐξ ὑπο-θέσεως. (86 E) その可教性を説明せんとした。(一) かくて「德は知識である」との假設を置いて話を進め、德の可教性を導き出してゐる、何んとならば人は知識以外のなにものも教へられないから。そして若し德が概念「知識」と同じ性質をもつてゐないとなれば此の假設は確實なものでなく、從つてその可教性も疑はれるわけである。

さて、一般に德は或る善なるものである。善なるものであつてしかも概念「知識」に屬しない何にものかゞあるとすれば德は知識でないと言ふ立言も可能なわけである。然るに概念「知識」に隷屬しない如何なる善なるものもないからして、德は知識であるとの此の承認は正しきものであり、德の可教性は必然的な歸結である。知識以外に横る善なるものはなく、從つて凡て善なるものは知識によつて認められ、凡ての善なるものは洞見、熟慮によつて初めてその眞なる價値を得るものなること、此等のことをプラトンは弟子達に次の如くに教へてゐる。即ち、德は善なる或るものであり、そして人間は善なるものをもつことによつて善である、そして人間の善なる心情は此れが惹き起す所の眞の效用によつて外部から認められる。そして此の效用は善なるものゝ結果であるからして、從つて自然、德はこの效用をなす所の善なるものゝ代表者として有用である。善としての德は für sich にも und für sich にも有用である。よしそれが物的見地に於て效用を招來するもの、例へば美、富、健康、强壯の如きものであつても、又知的見地に於ける、例へば思慮、正義、高貴、勇氣の如きものであつても。しかるに以上に言つたものは德の場合とは異つ

て凡ての場合に有用とは言へない、反つて相對的な價値しかもつてゐないのである。若し魂がそれを不正に使用したなれば害がある、例へば勇氣も熟慮なき大膽(θάρρος ἄνευ νοῦ 88 B)となつては害がある。更に事物の不正なる使用、そしてそれによつて生づる害は必然概念洞見以外にあるからして知識は美、富、健康、强壯、熟慮、正義、勇氣等を、それに正しき使用 ὀρθὴ χρῆσις (88 C) と效用とがつけ加る時のみ、己の下に包含する。從つて德は一方に精神的な善であり、他方凡ての事情の下に有用であるからして必然知識である。(二) 此れを公式をもつて表せば次の如くになる。

Alles ὠφέλιμον ist φρόνησις;

alle ἀρετή ist ὠφέλιμον;

∴ alle ἀρετή ist φρόνησις.

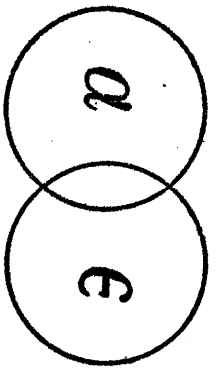
洞見が德の本質であるとの見解からソクラテスは次の如く考へた。即ち、彼は絕對的な效用をもつてゐないかの諸財寶に、それ等が洞見をもつた限りに、德の一部として道德的性質を呈へた。かくてかの洞見を缺ける正義、思慮、高貴とかの個々の德を外的な偶然的な財寶、言はゞ美とか富とか壯健とかと同じ地位に置いたの

である。

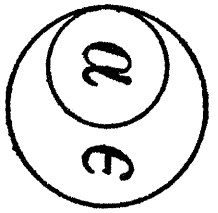
メノンはソクラテスの此の間接證明から次のごとき確信をえたのである。徳は洞見であり、そしてそれ故に知識によつては知られない善と言ふものは存在するものでない。そして又メノンは此の對話篇の最初に提出した徳は自然に吾々に具つてゐるものか、或は又教へられて具るものであるかとの質問に對しては上述の話から次の如き結論を必然引き出さざるを得なかつた。即ち知識は―その成果が道徳的な善であるが―學びによつて獲られるのであるからして、天然自然に善なるものは何ものも存在するものでないと。

(一) 徳は α とし 智識を ε とすれば徳と智識との關係は次の五通りになる

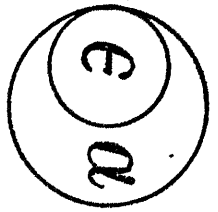
1.



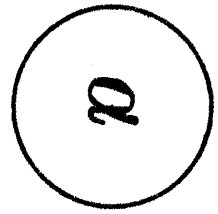
2.



3.



4.



5.

此の假説には1.3.のみがあてはまるが、然し1.は神の魂にのみ生じるとプラトンは考へてゐる。かくて Theat. 176 B が理解される。

(11) κατὰ τοῦτον τὸν λόγον ἀφέλει μὲν γε οὐδὲν τὴν ἀρετὴν φρόνησιν δεῖ τιν' εἶναι. 88 D.

四　德の不可教性　アニトスとの會話(89 E—94 E)

Wenn Tugend Wissen ist, ist sie lehrbar.

Tugend ist nicht lehrbar.

∴ Tugend ist nicht Wissen.

德は知識であり、從つて教へられるものであるとソクラテスは結論したが、然し彼は此に經驗上から疑を抱いた。メノンは此のソクラテスの疑念に全く驚いてその理由をたゞしてゐる。ソクラテスは德は知識であるとの前提の下に德の教へられるものとなすのは正しいのであるが、然し實際に德は常に知識であるかどうかを疑はざるを得ないのだと答へてゐる。此の論理的立場からではなく經驗的立場からなされたソクラテスの言葉からしてソクラテスは德の教へられ得る可能性を實に否定せずして、德の實際の教師の十中八九迄がもつてゐる缺點の結果德育の實際に疑問を抱いたものと考へられる。然しプラトンは何等定つた考

へなしにソクラテスに此の疑念を發表せしめてゐるのではない。一方にはソクラテスの當時の哲學上の反對者たる衒へるソヒストの間違つた教育法、又彼等の見かけ倒しの知識を批判し攻擊する機會を得んため(ソヒストの說によれば德の眞本質は知られぬ知識から從つて又德からは彼等の行爲は生じぬとする)、又他方ソクラテスをソヒストに對立せしめて知識や德の實際の正しき敎師はソクラテスなりと說かんとする意圖をもつてゐた。ソクラテスはプラトンが彼を性格付した樣に最も小なる事でも、最も大なることと同樣にその當時專ら判斷することを何よりも先づ自分の生涯の主義だと稱した人である。良心が彼に或る證言を呈へた時には彼は自分の判斷に充分な理由をもつたのであつて、その判斷に忠實に服從した。そして神的な事柄や、人的な事柄について熟慮することが長ければ長いだけそれだけ多く誤りから免れるのみでなく、彼は如何に困難な研究も閉ざれたものとは考へなかつたのである。そして絕へず研究を續けてゐた人である。又彼は判斷中で良心に從へるものをその行爲に移し、自分自身の統御を每日每日固め、絕へず之に熱中し、自分の外的生活と內的生活の關係を徹底的に研究し、內的

生活或は外的生活に於て病めるものを醫し、役に立つものを養育する所の人である。かくの如き人は當時の德論について判斷を下す必要があつたのである。そしてプラトンの眼にはかゝる人こそ眞の德の敎師だと考へられたのである。從つてプラトンはメノンを再び困却と當惑とに陷し入れて、メノンに代つてソクラテスに德ではなく、從つて敎育の方法では傳へ得られるものでないと言ふソクラテスの反對の見解を辯護する役割をやらしたのである。敎へ、又敎へられ得る凡てのものには敎師と徒弟とが存在しなければならぬのに、德に於てはその敎師が存在しない、とソクラテスは論ずる。彼は度々かゝる德の敎師を熱心に探し求めた、しかも自分獨りが探し求めたのでなく、かゝる點で或る經驗を書いた人と一諸になつて探し求めたが、しかも尙彼は德の實際の敎師を一人も見つけ出せなかつた。しかしてそれ故に此れ以上彼は德の敎師があるかどうかとの非常に重大な問題についての研究をメノンと共にすることを好まなかつた、そこで此の目的のために遇然此の場所に來たアニトスを彼は此の會話に引き入れてゐる。ソクラテスの告發者たるアニトスを此の會話に引き入れたプラトンの意圖を輕々に見

逃してはならぬ。プラトンはアニトスを此の會話に引き入れることに依つて此處に「ソクラテスの辯明」をなしてゐるのであり、ソクラテスを死刑に陷し入れた政治家―此處では殊にアニトス―に喰ひ掛つてゐる。此の事は會話の進むにしたがつて明になる。さてソクラテスはアニトスに向つて、人が自分の息子を或る術―例へば醫學―に長じたものに仕込まんと考へた場合には、その術を敎へると自慢し、約束するだけで實際にそれを理解しない人には息子を送らずに、反つてその術を實際に理解し又それに從事しそれを練習させる樣な人の許に送るであらう事を承認させて後に、ソクラテスはアニトスにかの主として國家的、市民的生活に缺くべからざる德を得んと志してゐるメノンを全へラス人に德の敎師であると言ひ振らしてゐるもの、卽ちソヒスト達のもとに行けと命じるのが得策であるかどうかと質問してゐる。アニトスは此れに答へて、ソヒスト達に彼を送るのは有害である。何んとなれば彼等は彼等と學問的にも又社交的にも交際してゐる凡ての人に墮落と不幸とを呈へるのみであるからと言つてゐる。此の事はアニトスがソヒストの人心を亂し人を墮落させる德論の露骨な反對者であることを示

してゐる。(一)　ソクラテスはアニトスを快活に非難して、アテナイの人々が今も常に非常に尊敬し尙後々も尊敬するであらう所のソヒスト達を良く知りもせずに或る情熱からかゝる侮蔑的判斷をしてゐるのであるとソヒストの徒たるメノンに聞へがしに言つて、然し今吾々はメノンの爲に求めてゐる德の敎師の道德的性質がどうのこうのと言ふ事を問題にしてゐるのではなく、專ら一般に德特に國家的、市民的生活に缺くべからざる德を習得するには人はどんな人につくべきかの問題を取扱つてゐるとたしなめた。　アニトスは有用な政治家は個人的には國家を道德的に統御し主宰し得るのみでなく又彼に敎へを求めるものには德を獲せしめ得るものであると主張したに對してソクラテスは反駁して、アテナイの有名な政治家を例として、それ等の人々は政治的關係では道德的な事をなし、又多くの德を實行に移したが、然し自分の息子に德を敎へる事が出來なかつた事を問題にしてゐる。　かくて例としてテミストクレス、アリステイデス、ペリクレス(二)等を引いて、此等の人は自分の息子を馬術家、音樂家に育て得たが、德を有する人には育て得なかつたと說明してゐる。(三)　然しアニトスは偉大な政治家―自分もアテナイの政治

家の一人として此の内に加へてほしかつたのだが―についてのソクラテスの言葉中に政治家の輕蔑を見出して、要慎しろ、と惡口して去つて了つた。(四) そこでソクラテスは再びメノンに話を向けて、メノンの故郷たるテッサリヤに實際に德の教師たる善良な人がゐるかどうかを尋ねた。メノンは此れに答へて、自分の母國では德の可教性については二樣の說があつて、一は此れを肯定し、他は之を否定してゐる。所で若者を教育する目的で國にやつて來る多くのソヒスト達の中で最も奥床しいゴルギアス―メノンは此の人の弟子である―は種々の藝能、特に辯論術を教へる事に責任をもつが然し德を教へるとは約束しない―此のゴルギヤスの言葉中にソクラテスは矛盾を見出してゐる―と言つてゐると言つてゐる。かくてソクラテスとメノンは意見一致して善良なる人―その内に奥床しい政治家も數へられてゐる―もソヒストも共に德を教へ得ず、又個々人、團體人の生活に對して最も大切な此の事柄には他にも教師はなく、教師のない所教へられるものもない、教師もなく生徒もないものは教へられない、從つて德は一般に教へられないと結論した。此の結論はパラドックスの樣に見えるが然し此れは比喩的に理解さ

るべきである。此の比喩は一般に德の敎師はゐないと言ふことを主張してゐるのであつて德の不可敎性については大して力を入れてゐない、何んとなれば此れ迄德、就中それの眞の本質も知らず、又此れ迄德が正しい意味で敎へられてもゐない事情から德の敎育は全く不可能であると結論してゐるが、此の推論は嚴密に言へば間違つたものであるから。メノンは然し此の推理を理解して、ソクラテスの志せる目的に近づいた。他のプラトン對話篇に於けると全く同樣にソクラテスは此處でも反對者を攻擊して反對者に自分の考への間違なることを知らしめてゐる。此處で言へば多くの人々の眼には正しいと思はれてゐるソヒスト達からも、實際の政治家達からも眞の德は敎へられ得ないと言ふ事をメノンに確信させてゐる。

(一) アニトスはソクラテスをソヒストの一人と考へてゐた。

(二) 共にアテンの有名な政治家なれどもその子は皆な不肖の子であつた。

(三) Protag. 319. E. ff.

(四) 94 E アニトスはソクラテス的會話を人を κακῶς λέγειν するものと考へた。

五　智識と正しき考への研究、神賦(1)(95 A—100 C)

メノンはソクラテスの上述の所論を肯定した。從つて一體そうすれば有德な人は如何なる方法でもつて、かの美はしき、幸なる狀態になつたのであるかを彼は尋ねざるを得なくなつた。ソクラテスはメノンの要求に從つて、德に達する他の方法を求めんとして、以前の德を效用あるもの、知識と結びついた性質のものであるとした定義に修正を加へて、正しい行爲は必ずしも知識と協力しなければならぬのではなくして、それには「正しき考」ὀρθὴ δόξα でも事足りると語つてゐる。人は此れに導かれて有德な人 καλοκἀγαθοί と呼ばれ、かくて彼等は多くの偉大な、正しい働をしたのである。論理的關係からこれを見るに次の事が明かになる。プラトンはソクラテスを一度は德を知識に、今度は正しき考へに基いたものと說明せしめ、これによつて單に正しき考へに立つ低次の敎へられない德と、知識と洞見とに根ざす學的、哲學的敎育によつて得られる高次の德との相違を說明せんと考へた。なんとなれば人は經驗や敎育によつて正しき考への範圍から眞の知識のそれに

高め得るし、又自分の内に眠れる德の萌芽を發展させんと努める人は、プラトンによれば、非常に低い道德的財寶の階段からより高き、又最高の階段にまで登り得るのである。而して正しき考へのみで正しく、道德的に行動するに充分事足ることをメノンにソクラテスは道案内の例で明示してゐる。テッサリヤの町ラリッサへの道を自分が通つた事があつて―即ち知つて―他人を案内する時は勿論であるが、その道を通つたことがないとしても―即ち知らずして―そこへの道程の正しき考へでもつてその人を又正しく案内し得るものである。これからして正しき考へと知識とは同じ樣に役に立ち得ると言ふ推論が導かれて來た。かくてソクラテスの說明によつて正しき考へは知識より劣つた善ではなく、正しき考へは實際生活に於ては知識と同程度に役立つものであるとせられた。然るに知識は正しき考へより高く評價されてゐる―とメノンは非難する―なぜなら知識はどんな事情の下に於ても求めてゐる結果に導いて行くが正しき考へは然し時々に間違を生ずるから。かくて長々しいソクラテスの知識と正しき考へとの相違の說明が續けられる。そしてその結論は次の如くである。正しき考へは靜止して

ゐるものでなく、確乎たる眞理を所持してはゐないで、反つて人間の魂からいつか消え去つて了ふ。然し正しき考へが一般概念と結びつけられる時、理論的根據を熟慮して、單に現象のみで滿足しない時にはそれは變化せず、(三)眞の效用を成就する。正しき考へは事柄の基礎を知らぬ。此の根據の關係、根據からの說明によつて正しき考へが縛られた時に—ソクラテスによれば想起がそれを縛るんだが—正しき考へは知識になる。(四) 卽ち眞理の不確かな豫感が眞理の確乎たる知識、眞なるもの、知識となる。そしてこゝにソクラテスの考へによれば正しき考へと知識との眞の差異がある。かくてソクラスは正しき考への價値を否定せずして反つて正しき考へは道德的行爲の惡い案內者ではないとの主張を正しいものと考へた。(五) そしてそれはある事柄の基礎(ロゴス)(原因)を正しく洞見し知る迄は知識の代理をし、そして αἰτίας λογισμός を得た時に人は正しく考へる人から知れる人となるとソクラテスは說明する。

此の篇の終りになつてソクラテスは再び最初の德は生れながらに人間に具つてゐるものか或は又敎へられて生づるものなるかの問題に立歸つて、三段論法に

よつて、此の兩者ともに德を獲るの道でない事を示してゐる。有德な人はそれが知識のためにしても正しき考へのためにしても、共に有益ではあるが、然し知識も正しき考へも自然に具るものではない。又德は敎育によつて獲られるものでもない、なんとなればそれが敎へられるものであれば明かにそれの敎師がある筈であるのに德の眞の敎師は實際には見出し得ないからである。かくてソクラテスはもう一度德は知識であるとの先の假設に立歸つて、行く行くはメノンがそれに踏み込まんと志してゐる政治家を念頭に明かにおいて、此の假設を否定せんと考へたのである。なんとなればメノンと共同してなした研究の結果では德は敎へられないと結論した。然るにあらゆる知識、あらゆる認識は學ぶ事によつて獲られる筈であるからして此の假設が正しいものであれば矛盾するからである。以前には德は知識或は正しき考へに基づくものであり得ると言ふ主張が打ち建てられてゐた。かくて―德が知識でないとすれば―德の此の二特徵の後者のみが存續し得る筈であらねばならぬ。その結果、あらゆる善なる、正しき人―特に一般的な德の意味に於ける高尙な地位の本務を正義と賢明さをもつて遂行する奧床

しき政治家―は知識によつて有爲な人となるのでないからして彼等は他を、殊に自分の息子達すらも自分と同じ様な有爲な人にする事が出來ない。それでソクラテスの考へによれば―メノンも承認してゐる所であるが―政治家達は正しき考へによつて自分の職分を遂行するのである。自然にも德は生せず、教育によつても獲られないのであるが、しかも此等のものは正しき考へをもつて道德的意味に於ける偉大をなし、そしてこれによつて眞の效用を成就するし、人の稱讃を博するのである。そして此の正しき考へによつて偉大をなすこの事は、ソクラテスの言葉によれば、神憑り、神の恩惠、神賦に θείᾳ μοίρᾳ(六) 基いてゐる。プラトンは此處に神賦によつて導かれてゐる有名な政治家を―此等の政治家をして昏迷に入るを防ぎ道德的に善なる行爲や、偉大な事業をなさしめる正しき考へを念頭に置き―詩人や豫言者と一列にしてゐる。(七) 此の神憑り、神賦のものは多くの美しき、すばらしき眞理を談ずる。然し彼等は自分の談ずる眞理を知つてゐない、卽ち論理的基礎 αἰτίας λογισμοῦ を缺いてゐる。それ故奧床しい政治家は無知なるに拘らず多くの立派な事、偉大な事を成し就げる。(八) 知識によつて有爲なものになり、そして自分

の德を敎へ、又自分の息子に傳へ得る政治家はソクラテスによれば政治家中の例外であつて、例へばテレシアスは生者の間でも死者の間でも只一人の知力ある人でこの一人である。(九) かゝる政治家と正しき考へに導かれてゐる政治家との比は恰かも眞物と影像との比と一般である。プラトンは國家を統治する時に現れる德を神賦と言はんとするのみならず、又神賦をより高き且つ最高の德に結びつけんとした事は疑のない所である。プラトンが人間の德を神賦の働であると說明してゐるのは、此の世に於けるあらゆる美なるもの、あらゆる偉大なものは神の權力、神の意志に根ざしてゐなければならぬと言ふ事をプラトンは固く信じてゐたからである。それ故に彼は自分の理想國家を神自身に基礎づけられたものとし、自分の理想とする法律は神自身から出發したものとして說明せんとしたのである。(一〇)

此の對話篇に於ける研究の終局的歸結は、ソクラテスの概括する所によると、德は天性に人間に植へつけられてゐもせず、學問、敎育によつても呈へられず、只神賦、神の恩寵によつて人に內在する。かくて然しソクラテスは德の本質をあらゆる

方面から説明し、規定して後初めて德を獲る方法が決定的に知られ、明瞭に理解されるのであると結論した。(二)

(一) Symp. 202 A. Staat 476 D. 拙稿 プラトン對話篇「テアイテトス」哲學十一輯

(二) 「正しき考へ」は經驗的智識である。國家篇では眞有のドクサは感覺的に知覺されるものと智識と解されてゐる。 Staat 447 A—478 E. 509 D—611 E. 533 E.—534 A. Symp. 202 A. Theait. 186 C ff. 哲學十一輯拙稿。

The distinction is that between empirical knowledge, on the one hand,—knowledge of the effect without its cause, of the mere particular without the context which explains it, or, at most, of a 'uniformity of experience; and on the other hand, scientific knowledge which is expressly stated to be knowldege of the causal ground in each case. The formar kind of knowledge, δόξα, does not abide with us; the latter, ἐπιστήμη, does, for it is bound by the chain of thinking which connects effect with cause—αἰτίας λογισμῷ (98 A)—and this αἰτίας λογισμῷ is expressly identified with ἀνάμνησις (98 A). (Stewart J. A., Platon's doctrine of ideas. Oxford. 1909. p 27—28.)

(三) 98 A.

(四) 98 A ἐπειδὰν δὲ δεθῶσιν (αἰτίας λογισμῷ), πρῶτον μὲν ἐπιστῆμαι γίγνονται. 86 A, Theait. 201 C—210 A ἐπιστήμη= ἀληθὴς δόξα μετὰ λόγον の批判參照。 哲學十一輯拙稿。

(五) 97 C. Οὐδὲν ἄρα ἧττον ὠφέλιμόν ἐστιν ὀρθὴ δόξα ἐπιστήμης., 97 B, 98 B,

(六) θείᾳ μοίρᾳ Phaid. 58 E. Staat 366 E 492 B, (Prot. 322 A, Phaidr. 230 A.)

此の語は Genialität der Anlagen+Begeisterung=gottgegebener Impuls, die Tugend zu erlangen.

(七) Ion 534 B, Apol. 22 C,

99 C. νοῦν μὴ ἔχοντες πολλὰ καὶ μεγάλα

(八) καταρθοῦσιν ἂν πράττουσιν.

(九) 100 A.

(一〇) Gesetz. 712 B, 713 A.

(一一) πρὶν ἔστιν τρόπῳ τοῖς ἀνθρώποις

παραγίγνεται ἀρετή, πρότερον ἐπιχειρήσωμεν αὐτὸ καθ' αὑτὸ ζητεῖν τί ποτ' ἔστιν ἀρετή.

六　結論

プラトンはソクラテスに眞面目に德の敎へられる可能性を肯定させなかつたし、又德の萌芽は人に自から自然に具つてゐると言ふ事も肯定させなかつたのは明である。然し此の對話篇の多くの場所にプラトンがソクラテスの會話を特徵づけるアイロニーが現れてゐる。このアイロニーは此の對話篇の末尾に出された結論を反對の意味に理解する權利を呈へてゐる。德は敎へられ得るし、又德の

萌芽は人に自から自然に具つてゐるし、又徳は神的な作用をその助けとして必要とするものであるとの此等の思想はさればなく論理的關聯上メノン篇の根底に横る思想である。(一) プラトン自身も「アルキビアデス」第一篇中に徳の可教性の例としてペルシヤの美しき習慣を述べてゐる。これによつてその父の死後最年長者として國家の統治權を承繼する筈である王の息子、アルキビアデスに徳の教師が任命されてゐる。即ち國民の中から四人の人を嚴選して、その内の一人を知識の、一人を正義の、一人を節制の一人を勇氣の、教師とした。(二) プラトンは一時は徳は知識であり、從つて教へられるものであると主張したが、しかも徳の教師は只の一人も見出せないと言つてゐる。これは明かに、人民の教師であり、有徳なる政治家に教へると約束してゐたソヒスト達に向つて言つてゐるのであつて、實踐的な事柄に於ても、純粋に理論的な知識に於ても知者であると誇つてゐたソヒスト達の教授法に對してプラトン―ソクラテスは眞向から反對したものである。プラトン―ソクラテスの考へる所では彼等ソヒスト達は根據ある知識、唯一なる眞の徳の概念知識を缺いてゐた。プラトンの信じる所では、徳が人に内在すると言ふ

事、卽ち德の萌芽が人の魂に既に具つてゐることは彼の魂の先在說から明かであるが、これによつて人は思想の萌芽、從つて又發展し得る、又眞の敎育の手で德にまで高まり得る道德的善の思想を伴つてゐる。されば正しき敎師の組織的指導によつて先づ、この素質から「考へ」(ドクサ)が開き、此の「考へ」は學び―デアレクティーク―によつて理由を驗討して知識となる。ソクラテスは此の篇で此の知識にくり返しくり返し賴つて話を進めてゐるし、又彼は此の知識を完成された追求するに價する德と見做したのである。ソクラテスが此の篇で積極的に說明した唯一の學說は「德は知識であり、目的、方法、その時々の行爲の條件を明かに意識した知識から生づる行爲である」と言ふことである。德は知識であるとの命題はあらゆる個々の德を統一したものであり、學問と練習とによつて獲られる所のものなることを示してゐる。然し德を働かすものはソクラテスによれば神賦である。如何なる德もソクラテスの考へによれば神賦なくては成立し得ない。されば嚴格に敎育されたスパルタ人の美しき道德に言及して、有德なる人を神寵ある人 θείος と言つてゐる。(三)素質と演習とが德の源泉であるから明かに神賦はかの德の源泉を現實に働かせ

るものであり、且つまさしくメノン篇末尾に言はれてゐるが如く德の本來の根元として考へられ得る。然し德の本質の問題は結論に達してゐない。そしてそれは尙つき進んで研究が必要である事はソクラテス自身言明してゐる所である。(四)然しこの樣な事は驚くに當らぬ、プラトン對話篇は完全な結論に達してゐないのが常であるから。(五)

さてプラトンがメノン篇を書いた意圖は何んであつたか。勿論哲學的見地より重要な此篇の價値そのものについて種々異說もあらうが、恐らく此篇はソヒストと政治家—アニトス—に對するプラトンの戰ひであり、從つてソクラテスを死刑にした政治家—此處でアニトスの役割が如何にも愚にもつかぬ事を恐れてゐるかを示してゐる—及び民衆への戰であることは爭のない所であらう。(六)メノン篇は實に當時青年教育に勢力のあつたあのソヒストの教育方法に反對して眞なる教育方法を示さんとしたものである、換言すれば Rhetorik や Eristik に反對して Dialektik を顯正せんとしたものである。從つて δόξα に對して ἐπιστήμη を提唱したものである。かくてプラトンは此篇にて自分の哲學の方法論を明かにした

ものと見ることを得る。(七)

(一) Seidel F., Intellektualismus und Voluntarismus in der Platonischen Ethik. 1910. ss. 61.

(二) Alkibiades I. 121 DE. 但し此篇は僞作とする說が有力である。

(三) 99 D. *οἱ Ἀθηναῖοι ἴσως τινὰ ἐγκωμιάζουσιν ἀγαθὸν ἄνδρα, "θεῖος ἀνήρ" φασίν, "οὗτος."*

(四) 五、註(1)

(五) In libris Platonis nihil affirmatur et in utramque partem multa disseruntur, de omnibus quaeritur, nihil certi dicitur. (Cic. Acad. I. 12. 46.)

(六) Lutoslawski W., p. 207. Not. 165. (R. Hirzel.)

(七) 石原博士「プラトンの對話篇「メノン」に就て」哲學雜誌第四四八號。

七　諸學者のメノン篇觀

(ルトスワスキー、ウイラモーウッツ、ナトルプ。)

ルトスワスキー(一)はプラトンの論理學に對するメノン篇の意義を見出して曰く、論理學の發見に數へられる最も重要な理論はメノン篇に於て初めて言ひ表されてゐる。他のデアレクテークの著作で度々言ひ表されてゐる論理的練習が此處

で初めて眞理への道に進む適法な方法であると紹介されてゐる(75 A)。論理的定義の目的は事物の本質(οὐσία 72 B)の決定であつて、そしてそれは外的現象の多樣中に統一を將來するもので(72 C)、此の統一が εἶδος である。しかし後期のプラトンのイデアの意味ではないが既に species の意味に於ける判然とした論理學の言葉となつてゐる。species の統一が、それが包含する所の事物の眞の本質である(100 B)。かくの如く研究の目的を建てゝプラトンは研究の方法に對して二三の法則を呈へてゐる。即ち、此處に初めてディアレクティークの手本を示してゐる。ディアレクティークとはプラトンによれば承認された觀念、或は前提に立つて說明することである(75 D)。又、疑ある考へを確乎たるものにする方法としてプラトンは假設からの推斷の檢討を奬めてゐる。此の方法が即ち假設論法 hypothetical argument であつて、プラトンは此れを幾何學から哲學研究に移したのである(86 E)。プラトンは此れをプロタゴラス篇で解き得なかつた問題に應用して成功し、德は、それが敎へられず單に傳統的經驗によつて練習される限り、カルミデス、ラケス、プロタゴラスに於て考へられる樣な或る種の知識では有り得ないとした。又プラトンが

肯定を特殊と一般とに注意深く區別してゐる(73 E. 89 A)のも吾々の論理的興味を索く所である。生得的觀念の理論は非常に大膽に紹介されてゐるのみならずそれは凡てのものゝ性質が同一であるとの形而上學的原理となつてゐる(81 D)。プラトンがメノン篇で言つてゐる生得的(a priori)な知識の形而上學的確信は新しい原理であつて、此處では古いソクラテスのアイロニーも無知も消え失せてゐる。尙プラトンは此の證明はなまやさしいものでないと前置して、彼の假設の經驗的な歸納的證明をしてゐる(82 A)。此の實驗の選擇と彼の實驗の仕方とは此の篇をして他の小對話篇に現れてゐるものよりもずつと程度の高い敎育學の作品としてゐる(82 B—85 C)。確かな知識の存在すること、その可能性への凡ての疑は取り除かれたのであつて、プラトンは大膽に正しき考へより遙かに高次の知識が存在し(98 B)、そしてこの知識は巧な質問によつて各人の內に生じるものだと語つてゐる(86 A)。正しき考へと知識との差異はその原因關係にある(98 A)。されば知識は單なる考へ—それが正しいものであつても—よりも價値が高い。此の新しい武器をもつてプラトンは倫理學の戰場に進んで、そして魂の不滅說を初

めて僧侶や詩人の誠なる、美しい話として出して來てゐる(81A)。そしてそれは人間思惟の性質を考察することによつて確認したのである(86B)。

ウイラモーウッツ(二)は曰く、プラトンがメノン篇を書いた時には既にアカデミアの彼の學校は始つてゐたのであらう。そしてメノン篇はアカデミーのプログラムとして書かれたものである。そして同時にプラトンの生涯に決定したプログラムを知らしめてゐる。彼の青年の夢は故郷に歸つても覺めることがなかつた。勿論少くとも彼が嘗て初めに考へたとは異つた意味での政治家ではあらうがプラトンは政治家を養生せんとした。そして國家篇を書き、國家はどうあるべきかを物語つてゐる。又プラトンは教師たらんとした。教へ得られる知識がなくては教師たり得ない筈である。しかるにプラトンは知識を有しない、が然し一層重要な事柄であるが―彼は知識を獲る方法を知つてゐた。かくて此の方法を證明せんとする課題が彼に生じて來た。此の方法に數多くの方法論的暗示や吟味がなされてゐる。そしてソクラテスは人間悟性は全く己自からの内から概念的眞理を見出し得るとの證明をしてゐる。幾何學の例からして、プラトンは新しいデ

アレクティークの方法、假設法、歸納法を學び知つた。而してパイスとの會話によつて練習の效用を明かにし、知識の敎へられることを實際に證明した。そして此の事は吾々の求むる敎師のある筈なる事を明にしてゐる、(從つて自分がアカデミーで敎師となるのも誤つた事ではない)。知識が可能であり生得的な悟性の力をもつて人に內在してゐる眞理を得ることが出來れば政治の知識もあり、政治的行爲の敎育と言ふことも可能であるべきである。正しい政治家とは永遠の世界から知識をもつて來てゐる魂の潛在力を喚起することを知れる人である。プラトンは彼の遍歷時代に學は存在すると確信を得た。知識は存在する。そしてそれは敎へられる。彼は此れを敎へん志したのである。此れがメノン篇全體の意味で尙ある。ウイラモーウッツはPolykratesの誹謗文に言及してメノン篇のプラトン傳記に對する價値をも認めてゐる。

ナトルプ(三)は所謂マーブルヒ學派のプラトン解釋を奉ずる權威者にして、ツェラー、ウインデルバンド等に反對してイデアは假設、規則、法則であつて物ではないと解して所謂イデアの妥當說を奉じた。彼はメノン篇の偉大な業績をa priori.の發

見、即ち德の成り立つ知識は Erkenntnis a priori でなければならぬ、德は自己意識に根ざさなければならぬ、とした所に見出してゐる。而してナトルプはメノン篇をプラトン哲學發展史上の重要なものと考へて、此篇はプラトンの思想發展の萌芽だと考へた。就中此の樣な見方はプラトンのイデア論について最も顯著であるとして次の如く論じてゐる。學ぶと言ふ事、即ち、知識を獲る事は吾々自身から、或は吾々自身の內での(„Aus" oder „in" uns selbst)創造である、即ち此れが想起である(Das Zu-sich-selbst-kommen der Vernunft. Ein Schöpfen aus sich selbst.)。洞見、概念、學は思惟の內に於てのみ思惟の特殊な方法によつて生じ得るのであつて、外部から魂に移されると言つた樣な一般に考へられてゐる意味に於ては敎へ得られない、とプラトンがしたのは一大發見である。プラトンは此の事を簡單な幾何學の例で說明してゐるが、此の方法は哲學的に考へる數學家(philosophierende Mathematiker)や數學的に考へる哲學者(mathematisierende Philosophen)は皆正しいものとしてゐたさて存在する凡てのものゝ眞理は魂の中、意識の底にあるのであつて適當な手續によつて魂の中から引き出されるのである。然しそれは時間的な現實な事實が

魂の中にあつて、そしてそれが魂の中から漸々に作り出されるのではない。かゝて第一に die „reine" Erkenntnis der Wissenschaften (85 E) が問題とされ此れは Selstberkenntnis であり、Selbsterkenntnis は Erkenntnis des Objekts と離れるわけには行かぬ。かゝて對象は意識の法則によつて作られるが、吾々は此の法則、所謂眞實の法則のみを理解し得るとナトルプは論じる。

(一) Lutoslawski, W., The origin and growth of Platon's logic. London. 1897. p. 207—210.

(二) Wilamowitz-Moellendorff, U. V., Platon. Berlin. 1919. Bd. I. S. 272—282.

(三) Natorp P., Platons-Ideenlehre. Leipz. 1921. S. 29—42.

ナトルプのプラトン解釋については後の機會に詳論されるであらう。只此處には所謂安當說の立場をとれる學者とその著述を記して置くにとゞめる。

H. Cohen, Die platonische Ideenlehre, psychologisch entwickelt. 1866.

〃 Platons Ideenlehre und Mathematik. 1879.

P. Natorp, Platons Ideenlehre. 2 Aufl. 1921.

〃 Über Platons Ideenlehre. 1914.

G. Falter, Beiträge zur Geschichte der Idee. 1906.

N. Hartmann, Platons Logik des Seins. 1909.

J. A. Stewart. Platon's doctrine of ideas. 1909.
S. Marck, Die platonische Ideenlehre in ihren Motiven. 1912.
H. Barth, Die Seele in der Philosophie Platons. 1921.
W. Kinkel, Geschichte der Philosophie von Sokrates bis Aristoteles. 1922.
K. Vorländer, Geschichte der Philosophie. 1921
Tennemann, System der platonische Philosophie. 1797.

八　ἀρετή の語義(一)

プラトンは一體概念「德」の下に如何なる意味を理解したであらうか。彼は一般ギリシヤの用語例に從つて概念「德」を事物の本來の目的に相應し得る或る事物の性質、或る物がその物のゝ本性であり得る狀態を理解した。此等に反對したものは惡 κακία である。此の意味でプラトンはそのものが自己の課題、目的に相應してゐる狀態にある限り目の德、耳の德についても語つてゐる。(二) それ故にその本性に横る所の目的を滿たし、それ故に有用になるそれに固有の德をあらゆる物はもつてゐる。德は本性に適ひ、目的に相應した存在であるとの此の德の根本概念から

次の如き規定が生ずる。あらゆる物の德は(一)眞に善なるものである。なんとなれば事物の善はその物と關係のない或るものでも、外部からそれに借りたものでもなく、それの內的本質に屬し、それに根本的に個有なるものである。(三) 或る事物の德は更に(二)そのものゝ美である。なんとなれば或る物はそれの適度の存在により、中庸を保てる、良く整つた本質により、部分の全體への內的調和によつて美であるから。プラトンの主張する樣に、ギリシヤ語の正しき用法に於ては美と善との概念は同一であり或は固く結合されてゐるものである。(四) 德は事物の美であり善であるからそれは又(三)その事物には眞の效用であり、利益でもある、なんとなれば美と善の概念は根元と作用との關係に於て效用の概念に味方するから。(五) そして結局本性に適へるものは又快適であり、(六) 一般に快適は美や善のモメントであるから。(七) 事物の德の內には又(四)そのものゝ快適な存在が成立する。故に德は例へば肉體の德はその肉體の效用ある事、强健なること、美なること、健康なることである。此等の凡ての規定は狹い意味に於ける德、卽ち、魂の德についてもあてはまる。魂の德は魂の任務を遂行し、その目的に適合し得る魂の本質に適へる存在である。(八) そ

れは魂と關係のないものでもなく、他のどこかから魂に生じ得るものでない、反つてそれは魂の本質に個有なものであり、魂の内的本質に屬する所のものである。(九)

されば德は an und für sich に魂の眞の善である。更にそれは魂の眞の美であり力であり健康(一〇)である。人が不正をもつて外的な大利益を獲得する時にも不正よりもより效用あり、より有德であり、より正しくあるべきものがあるかどうかとの質問は笑ふべきものとして說明されてゐる、何んとなれば魂の德なくしては肉體の健康も美も又富も他のその樣なものも最高の善と稱揚されぬし、又何等の價値もないから。されば德は一般の德の稱讚者が言ふ樣に(一一)面倒なものでも厄介なものでもなく、それは魂の本性に適へる存在として快適であらねばならぬ。かくて有德な人のみが眞の快樂を持ち(一二)、斷然道德的領域にては正、善、美の概念は快適の概念とは分離しないことが要求される(一三)。

德が人々にとつて眞の善、美、效用であるなれば、何故に凡ての人によつて實行されぬかの質問に對してはプラトンは答へて、それは無知から生ずるとした。なんとなれば何人も不正な、放逸な惡を、卽ち自分のなす所のものが自分に惡いと言ふ

ことを知らずして、反つてそれが自分に善いとの間違つた考へで、そして大衆の考へは根本に間違つてゐるが、怒や復讐や快樂を求むる情熱に導かれて己の知に反して行動してゐる。からである、言はゞ何人も自發的に惡ではない。(二四) 善であり正であるものを知らぬ事が凡ての惡の源であるとプラトンは考へた。そして此の無知こそが人には根本の惡、魂の病であるとした。(二五) そして反對に善や正の知識は人に正しき行爲、善なる行爲を必然的に結果さすものである。知は德への根本規定であり、知なくしては眞の德はなく、一般に善なるものは何ものもない。(二六) 知ある所、そこに正しき德がある。されば生涯を知に導かれる哲學者は凡ての德を有する。(二七) 知は德の根本規定であるとの命題から必然德は敎へられるものであらねばならぬと結論される。(二八) 知と結びついてゐない德行、單なる習慣的な德行を如何に價値なきものとプラトンが說明したかはパイドン篇、國家篇に於て說明してゐる所から明である。(二九)

かくの如く德の語義を明にし、他篇に於ての德と知との關係を明にすればメノン篇の意義も又那邊にあるかを知ることが出來るのであつて、德は知識であると

の定義を教師の無きことによつて經驗立場から否定せんとしたものではなく、經驗證明の目的は他にあつたことが肯定し得られる。

(一) J. Steger, Platonische Studien. Innsbruck. 1870. Bd. 2. S. 17—22.

(二) Staat. 353 B. C.

(三) Symp. 205 E. Charm. 168 D. Gorg. 506 E. Staat. 586 E.

(四) Symp. 201 C. 204 E. Phil. 64 E. Tim. 87 C. Prot. 359 E. 358 B. Lys. 216 D. Hipp. Mai. 297 B.

(五) Menon 87 E. πάντα γὰρ τἀγαθὰ ὠφέλιμα. 98 C. Prot. 333 E. 358 B. 359 E. Hipp. mai. 296 D. Staat 379 B.

(六) Tim. 81 E.

(七) Gorg. 474 E. 477 A. Phil. 51 B. Tim. 47 D. 80 B. Hipp. mai. 298 A.

(八) Staat 353 D.

(九) Gorg. 478 D. 505 B. 509 B. 488 C. Staat 445 A. 591 B.

(一〇) Staat 44 E. Phaid. 114 E. Staat. 491 C. 521 A. 550 E. 555 C. 591 C.

(一一) Staat. 364 A.

(一二) Staat. 581 E. 586 E. 587 B. Legg. 733—734 E.

(一三) Legg. 662 A. 663 A. Alkib I. 116 C. D.

(一四) Prot. 345 D. 352 A. 355 A. B. 357 C. 358 C. E. 359 D. 360 B. C. Gorg. 460 B. 466 D—468 E. 438 A. 509 E. Menon. 77 C—75 B. Apol. 25 DE. Soph. 228 DE. Staat. 382 A. 412 E. 589 C. Legg. 731 C. 734 B. 860 D. 902 A.

904 C. D. 875 A.

(丨卌) Tim. 86 B. 88 B. Prot. 358 C. Soph. 228 B. Hipp. min. 372 E. Staat. 350 D. 351 A. Theait. 176 C. ἡ δὲ ἄγνοια ἀμαθία καὶ κακία ἐνναρής.

(丨廿) Menon. 87—89 C. Euthyd. 279 A—282 C. Gorg. 460 B. Phaid. 69 A. Symp. 112 A. Prot. 318 B. Staat. 349 E.

(丨卅) Staat 443 A. 485 C. 486 A—487 A. 490 A. 492 A. 500 C. D. 618 C. 619 E. Phaid. 68 C. 82 A. 83 E. 114 E. Gorg. 507 A.

(丨卌一) Menon. 87 B. Prot. 329 B. 361 A. B. Euthyd. 274 A. 282 C.

(丨卌二) Phaid. 82 B. Staat. 619 C. D. Hipp. min. 376 A. B.